

ノヴァーリスにおける統合的感官としての「眼」： 「自己感覚」から「心情」へ

大澤，遼可

<https://hdl.handle.net/2324/4784375>

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（文学），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 大澤 遼可

論 文 名 : ノヴァーリスにおける統合的感官としての「眼」
——「自己感覚」から「心情」へ——

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

ドイツ初期ロマン派の詩人ノヴァーリス(1772-1801)によれば、世界は本来「精神の啓示」である。それは静的かつ固定的な事物の寄せ集めではなく、本来的に「精神」と呼ぶほかない不可視の根源的な力とその連関のうちにある。しかし現状においてその連関を認識することができないわれわれは、「精神の啓示」を読み取ることもまたできない。ノヴァーリスはそのような状況を「世界の意味」の喪失と呼ぶ。彼の詩学において一貫して目指されているのは、この失われた「世界の意味」の回復であり、それは世界と「精神」との根源的連関の回復によって果たされる。この連関において、超感覚的な「世界の意味」は感覚可能なものとして認識される。その限りで世界とは読解可能な一冊の書物に他ならない。ノヴァーリスは自らの詩学的使命を「一冊の書物に宇宙を見出すこと」だと言明している。「書物」と「世界」との内的連関の回復、すなわち「世界」が書物であり、かつ「書物」は世界であるという二重の方向において現れるこの連関を取り戻すこと、これこそノヴァーリスが自らに課す「使命」である。それは超感覚的である「精神」が感覚的に表出した「啓示」として世界を知覚し、読解する観察者の態度を表明すると同時に、そのように認識した世界を再び「書物」として提示する詩的活動を指し示す。この問題は、人間が世界をいかに認識しうるのか、そして認識したその世界をいかに記述しうるのかという二つの論点に集約されながら、ノヴァーリス文学の基盤を構築していく。

人間はいかに世界を認識しうるとノヴァーリスは考えたのか、そしてそれはいかなる能力によって可能となるのか、本論第一部が扱うのはこの問題である。第一章ではまず、ノヴァーリスの思想の基盤をなす哲学研究ノート「フィヒテ研究」を考察の対象とする。ここでは、フィヒテの自我論を批判的に受容しながら、「自己感覚」という身体性に基づく世界と自己との根源的な一体感に自我の根拠を置くノヴァーリス独自の認識論を明らかにする。

その後、恋人の死という重大な出来事を経験したノヴァーリスは、専門的に自然科学を学ぶことを決心した。第二章は、こうした中で成立した長詩『夜の讃歌』を中心に扱い、彼の関心

が具体的身体へと向けられることになるその経緯を明らかにする。つまり、ノヴァーリスの自然科学への専心とは、恋人の死の単なる克服ではなく、普遍的な原理へと、ひいては自然そのものにまで恋人を昇華して、追悼することであった。

第三章では、ノヴァーリスの自然科学に関する読書ノート等を含む「フライベルク自然科学研究ノート」を考察の中心に据える。その分析を通じて、彼の自然科学が外的な諸事象の合理主義的な把握を目指すものではなく、不可視のもの可視的な顕現として世界を捉えようとする試みの上であり、それは超感覚的なもの、あるいは超越的なものを含みこんだ一つの全体として世界を見ようとする自然観へと差し向けられていることを示す。

第四章では、これまでの認識論的、自然科学的思考をもとにノヴァーリスがいかにして理想的な感官、あるいは認識のあり方を構想していたかを明らかにする。それは人間が絶対的主観として世界を対象化し、それを合理主義的に把握するような近代的認識のモデルに従うようなものでは決してなく、人間をも含み込んだ一つの全体として世界を捉えるような独自の認識の構成を持つ。このとき「眼」という感官は、自らを絶対的主観となし、その認識の対象である世界から自らを切り離すものではなく、自らもまたその成員として含み込んだ一つの全体として世界を捉えることのできる新たな能力として捉え直されることになる。

以上、「書物の世界化」を考察の中心に据えた第一部に対して、「世界の書物化」を論じる第二部ではノヴァーリスが独自の認識のあり方において知覚した世界を、いかにして記述しようと試みたのかを究明する。無限に展開する世界を有限の言語によって記述するという矛盾した行為がいかにか可能であるとノヴァーリスが考えたのか、この点をまず明らかにする。第五章では、ノヴァーリスが「科学的な聖書」と称した独自の記述の本質を探り、その実践である百科全書的記述がいかにして世界の全的な記述を目指すのかを示す。続いて、人間が自らを自我として認識している限り、「自己感覚」という根源的状态には決して回帰しえないことを前提としながら、ノヴァーリスによって新たに提起された「心情」が失われた世界と自己の一体感の場であることを論じる。

第六章では、「心情」を描出した「ポエジー」の成果である未完の小説『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』を考察の対象とし、ノヴァーリスがこれによっていかにして理想状態の実現を企図していたのかを探る。ここで明らかになるのは、主人公ハインリヒという個人の歴史の叙述を通じて、普遍的な世界の歴史の提示を目指すという、同小説に貫かれた理念である。

以上の論述を総括して言えば、統合的感官としての「眼」に基づいて凝集された「書物の世界化」と「世界の書物化」という二方向にこそ、ノヴァーリス詩学特有の原理が、詰まるところ、詩人の「使命」がある。